

ナビ

1月号
vol. 227

謹賀新年

二〇二六

あとの
社会科

第22講 歴史——女工物語・第4章

「松之宮ホースパーク」
旧松之宮小学校(旭3丁目5の39)にて撮影

すとなひ 社会科

第22講 歷史——女工物語・第4章

昔、使った教科書をパラパラめくってみると、あの頃には気づけなかった面白さがみえてきた——そんな経験はないだろうか。学校の教科書は昔と同じではない。だから、大人になってからの学び直しも決してムダではないはず。学校に通つてた頃を思い出して、もう一度、目の前に広がる社会を学び直してみませんか。

脇に立つ一人の女性を見た。古風な着物姿で髪を結い、大浪通のガードレールに小柄な身体を預け、通り過ぎる大型トラックの排気ガスを浴びて寂しそうに佇んでいた。



工場町の島唄

大正駅には暮らし始めてもう7年が経つ。この街は歴史的に沖縄と縁が深く、区民の4分の1が沖縄にルーツを持つと言われている。大正駅前には何軒もの沖縄居酒屋があり、そこから南へ下った平尾

それは眠れない夜に、木枯らしの中を近所のコンビニに行つた時の話である。北恩加島の交差点の(1)。

は「リトル沖縄」と呼ばれる沖縄系住民の集住地区である。商店街には沖縄の物産店などがあり、海の向こうの空気が色濃く流れる

（昭和4）年で、沖縄・屋我地島（やがじま）の歌が作られたのは1929年である。ある男性が「カミー小」（カミー少）と呼ばれていた身近な女性の話を基に書いたのだという。それを那覇の遊郭の遊女たちが好んで歌つことで全国に広まり、特に関西の沖縄出身者の間で愛唱されるようになった。

は
レ
「トにあらゆるもとに詠語
が短縮され、物語の内容も変わつ
ていて。今回はより原詞に近い、
大城美佐子の歌う今帰仁天節を
道案内したい。あれから北恩加
島には行つていないが、あの夜に
見た女性はカミー小だったのだと
私は信じていて。

ソテツ地獄を逃れて

物語の始まりは、1908（明治41）年の沖縄本島北部。今帰仁村の喜茂山（よしみやま）という集落にカミー小生まれとなっているが、「これは歌を書いた男性が、主人公のモデルが特定されないように配慮した結果である。

1918(大正7)に大戦が終結した後も沖縄の好景気は続くが、それも欧米の経済が復調するまでだった。黒糖の価格は1920(大正9)年をピークに暴落し、黒糖に依存していた沖縄の経済はたちまち破綻した。

深刻な戦後不況で農村は疲弊し、食料不足から毒性の強いソテツを食べて命を落とす者も現れる。こうした惨状は「ソテツ地獄」という言葉で盛んに報道された。今帰仁など沖縄本島の北部は、南部

1914(大正3)年、カミーの砂糖輸出が壊滅したことで、沖縄では主力産業たった黒糖の価格が3倍にまで上昇する。黒糖は飛ぶように売れ、財を成した商人や農家は「砂糖成金」と呼ばれた。空前の好景気で真夏のように明るい時代だったが、カミー小はこの時期に両親と死別している。

に比べて特に経済的に厳しい状況だったたといふ。
困窮した人々は、移民・出稼ぎ民として日本本土やフィリピン、南米などに新天地を求めた。当時は那覇港と大阪港の間に多数の定期航路があり、20年間で4万人以上が黒潮の流れに乗つて大阪へと渡つた(②)。

若い娘たちの多くは本土の紡績工場へ出稼ぎに行つたが、不況下



小林町の沖縄村。住民はここを沖縄の言葉で「ケブングー」と呼んだ。ケブンは窪地の意味で、グー(小)は親しみを込めた呼び方。歌の主人公であるカミー小は「カミーグー=カミーちゃん」という意味になる

5

で人身売買が横行しており、遊郭に売られる娘も珍しくなかった。両親のいないカミー小は身売りを免れて生き延びるが、そこにはどのような事情があつたのかは分からぬ。

暮らす居る内に 行う欲さや大阪
情ある叔母 云々言葉んすむぢ
大阪北恩加島 街頭て来しが

今からちょうど百年前の、元号が大正から昭和に変わった1926年。今帰仁を出た18歳のカミー小は、那覇港から大阪行きの船に乗って海を渡った。大阪では叔母の家に身を寄せるが、いい扱いを受げず苦しい日々が続く。やがてカミー小は家を飛び出し、大規模な沖縄コミュニティのある大正区の北恩加島まで流れてきた。

がて北恩加島の沖縄出身者は6千人を超えて、大阪で最大規模の沖縄村となつた。

貧しさと差別の中で

五 “かかるかたねらん 縄がるかたねらん 我部ぬ新垣ぬ嫁に我ねなやい”

六 “一年一年や 梅と鳶ぬ如に暮らす居る内に 産子一人できて”

カミー小が北恩加島で暮らし始めた1927（昭和2）年の調査では、東洋紡績の三軒家工場で162名の沖縄出身者の女工が働いていた。カミー小が何で生計を立てていたかは不明だが、大阪に来た沖縄の女性は8割が紡績女工だつたことを考えると、カミー小も紡績関連の仕事をしてい可能性が高い。

かかるかたねらん、縄がるかたねらん（頼れる人も、縋がれる人もいない…）。希

望を持つて北恩加島にやって来たカミー小だったが、沖縄村とはいえ家族も友人もいない暮らしは厳しかつた。そんな時、今帰仁の近くにある屋我地島から出稼ぎに来ていた新垣という男と知り合つて、二人は一緒に暮らすようになり、やがて娘も生まれた。

この時期に、木津川を隔てた西成区の今宮界隈にも6千人規模の

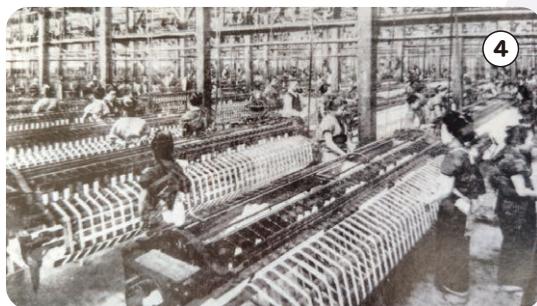
大正区の一帯は江戸時代の新田開発で拓かれた農村だつたが、明治後期から大阪市の発展に伴つて都市化の波が押し寄せる。第一次世界大戦が始まると船舶の需要が高まって造船ブームが起つて、水運の良い木津川沿いに大小の造船所が林立した。

1916（大正5）年には木津川と大阪港を結ぶ木津川運河が完成

成し、沿岸の南恩加島・鶴町にセメントや製鉄などの大工場が進出する。同時期に開削が始まつた大正運河の沿岸には、大阪市内の西長堀から木材業者が集団移転。周辺には数百軒もの製材所や木材問屋が集まる、西日本有数の木材街が形成された（③）。

沖縄出身者の男性は貯木場や製材所、鉄工所などで肉体労働に従事した。当時の大正区は湿地帯の干拓や埋め立てが盛んで、土木関係の仕事も多かつたといつ。木材街から北へ上つた三軒家には東洋紡績の三軒家工場が立地し、沖縄の女性はこうした工場で紡績女工として働いた（④）。

当時の大阪は工業化によって多くの労働力を必要としていたが、沖縄出身者の働き口は一部の紡績企業を除いて低賃金の日雇い労働に限定されていた。住宅の入居案内や求人の貼り紙に「琉球人お断り」と書かれる状況で、彼らは身



東洋紡績三軒家工場。2千人超の沖縄出身者が働いていたという記録もある



大阪商船が運航していた波上丸。大阪から那覇までを2泊3日で結んでいた



北恩加島付近の貯木場。重い丸太の運搬は沖縄出身者によって担われていた

成し、沿岸の南恩加島・鶴町にセメントや製鉄などの大工場が進出する。同時期に開削が始まつた大正運河の沿岸には、大阪市内の西長堀から木材業者が集団移転。周辺には数百軒もの製材所や木材問屋が集まる、西日本有数の木材街が形成された（③）。

沖縄出身者の男性は貯木場や製材所、鉄工所などで肉体労働に従事した。当時の大正区は湿地帯の干拓や埋め立てが盛んで、土木関係の仕事も多かつたといつ。木材街から北へ上つた三軒家には東洋紡績の三軒家工場が立地し、沖縄の女性はこうした工場で紡績女工として働いた（④）。

当時の大阪は工業化によって多くの労働力を必要としていたが、沖縄出身者の働き口は一部の紡績企業を除いて低賃金の日雇い労働に限定されていた。住宅の入居案内や求人の貼り紙に「琉球人お断り」と書かれる状況で、彼らは身

を寄せ合つて生きることで助け合ふしかなかった。

木村街が広がる北恩加島や小林町では、沖縄の労働者たちが製材所から出た廃材を拾い集め、低湿地の一角に粗末なバラック小屋を建てて住み始めた（⑤）。このよ

うな居住地区は「沖縄村」と呼ばれて、彼らが故郷の家族や親族を呼ぶことで拡大していく。や

び寄せる」とで拡大していく。や

うな居住地区は「沖縄村」と呼ばれて、彼らが故郷の家族や親族を呼ぶことで拡大していく。や

建成し、沿岸の南恩加島・鶴町にセメントや製鉄などの大工場が進出する。同時期に開削が始まつた大正運河の沿岸には、大阪市内の西長堀から木材業者が集団移転。周辺には数百軒もの製材所や木材問屋が集まる、西日本有数の木材街が形成された（③）。

沖縄出身者の男性は貯木場や製材所、鉄工所などで肉体労働に従事した。当時の大正区は湿地帯の干拓や埋め立てが盛んで、土木関係の仕事も多かつたといつ。木材街から北へ上つた三軒家には東洋紡績の三軒家工場が立地し、沖縄の女性はこうした工場で紡績女工として働いた（④）。

当時の大阪は工業化によって多くの労働力を必要としていたが、沖縄出身者の働き口は一部の紡績企業を除いて低賃金の日雇い労働に限定されていた。住宅の入居案内や求人の貼り紙に「琉球人お断り」と書かれる状況で、彼らは身

を寄せ合つて生きることで助け合ふしかなかった。

木村街が広がる北恩加島や小林町では、沖縄の労働者たちが製材所から出た廃材を拾い集め、低湿地の一角に粗末なバラック小屋を建てて住み始めた（⑤）。このよ

うな居住地区は「沖縄村」と呼ばれて、彼らが故郷の家族や親族を呼ぶことで拡大していく。や

び寄せる」とで拡大していく。や

うな居住地区は「沖縄村」と呼ばれて、彼らが故郷の家族や親族を呼ぶことで拡大していく。や

お出汁が身体に染み渡るおいしさ!

「貝鮮と鍋 食いしん坊横丁」

にしナリキム

食いだおれの街・大阪ミナミのさらに南の街・西成。
まだまだ発掘されていない「にしなりもん」を味わい尽くします。

冬は、日々厳しくなる寒さと年末年始に向けた仕事の忙しさで心身ともに疲弊ぎみに。そんな時は身も心も温まる「鍋料理!」だと思う。お店を探していると、よく通る26号線沿いに見慣れない提灯に「貝鮮と鍋」の文字。筆者の直感が働きこのお店に決め、後日いざ訪問。

「貝鮮と鍋 食いしん坊横丁」という名の当店は11月6日にオープンしたばかり。訪問時は開業からまだ1か月も経っておらず、入り口には開店祝いのお花が飾られていた。

17時オープンと共に入店、店内は綾長の形で手前にカウンター6席と2人掛けテーブル2つ、奥に4人掛けテーブルが2つ。カウンターに着席し、まずはメニューを拝見、鍋料理は11月から3月下旬までの提供とのことで、今回は「名物!」のかき鍋をチョイス。追加で地鶏もーー。一品では貝と魚のカル

パッチョのサラダ、サーモンユッケを注文。かき鍋とともに料理が運ばれてくると一気にカウンターの上が華やかになる。さらにはお通しでも牡蠣が出て(お通しは日替わり)、ここはベタだが「海の宝石箱やー」という某リポーターのフレーズが頭の中でグルグル回る。実は筆者はかき鍋が初めてなので、



食べた時の息を吐く。食は人を幸せにするなあと思いつながら一旦落ち着く。鶏肉も野菜もおいしく、何よりお出汁のうまみが身体に染み渡る。

店長さんに「いかがですか?」と聞かれると「おいしいです!」の即答で、筆者ももう少しおいしさを伝えるボキヤブラリーを増やさなければいけないなと反省しながら思うのは、お話しした時に出る店長さんの笑顔。写真を撮る時に「店長さんも写りますか?」と聞くと、「私が写ると怖がられる...」と謙遜されていたが、店長さんの笑顔はお出汁と同じくなんだか体に染みるものがある。

さて、メの雑炊を頼もうとメニューを眺めて見つけてしまったのは、「牡蠣」と同じくなんだか体に染みるものがある。

心も身体もポカポカして店長の笑顔に見送られながら、ちとぞうさまをして店外へ。駅まで歩く道中も温かさが続き、いいお店を見つけたなと思い帰路につく。

文責・笹川勝正

貝鮮と鍋 食いしん坊横丁

住 所・西成区橋1丁目3番5号

ナックルナイサーくるビル1階

営業時間・平日17時~24時 土日祝14時~24時

(どちらもラストオーダー23時)

定休日・火曜日

電話番号・06-6115-7673

[住友宣夫]この前激しい咳込みで病院へ行き、周囲はインフルの患者ばかり。身構えながら検査の結果を待っていたが結果はただの風邪でした。少しほっとした一日でした。



[笹川勝正]競技かるたの試合を観戦に、かるたの聖地・滋賀県近江神宮へ。畳上の格闘技ともいえる熱戦で応援する側もおもわざ手に汗にぎる戦いでした。



[沖田一志]メモリの値上がりが半端ない。1ヶ月前から考えると2倍。AIでデータセンタ需要が増えた影響らしく、この状況が変わる見込みはない。今年の終わりにはどこまで上がってるだろう?



[磯拓哉]寒さが厳しくなってきて、鍋が美味しい季節になりました。市販の「鍋の素」今めちゃくちゃ種類が増えていて最近は色々試すのがブームです。オススメはミツカンのキムチです!

食べごろがあまりわかつておらず、ぐつぐつ煮込まれている牡蠣を横目にユツケやサラダをいただく。どちらの一品料理も美味しくレベルが高い。

そもそも牡蠣も食べようかと思い、店長に聞くと、ちょうどタイミングで「うまい!」の一言につきる。口の中が熱くなるのも気にならず牡蠣を2個一気に食べて、ビールをグビッと飲む。ここまで一息だつたので、フード本当に美味しいものを

も取材予算
オーバー!



此事争論

些事でも何でも気になつたらあれこれ考えてみよう。いいこと思いつくかもしれないし。気がついたら西成にたどり着いていた、或るオタクの物好き系コラム。

日本酒がおいしい厳冬期

しんしんと寒さが増してくる冬の晩、気のおけない友人と鍋を囲みながら、食卓で熱々のおでんを頬張りながらいただく日本酒は、格別の味わいです。

うまさけはうまさともなく飲もううちに酔ひての後も口のさやけき

この歌は、酒づくりの泰斗・坂口謹一郎博士が研究のあいだに詠まれた和歌の一つです。歌集『発酵』には酒蔵でお酒が醸される様子や、研究室で実験される思いを詠んだものが多く、名著『日本の酒』とともに私が日本酒に親しむきっかけとなつた本です。

日本酒のことに少し興味がある方にお薦めの番組をご紹介します。まずは、イラストレーターで酒場詩人の吉田類さんの『酒場放浪記』。全国の酒場の聖地へ酒と肴を求めさまようもので、私も放浪マップのお店を訪ねて一人で悦に入っています。同じく、グラフィックデザイナーの太田和彦さんの『ふらり旅いい酒いい肴』。これも各地の居酒屋で地元の銘酒と肴を愉しむドキュメンタリーで、女将さんや板前さんとの会話が魅力です。もう一つ、名脇役の俳優・六角精児さんの『呑み鉄本線』。

日本旅。鉄道沿線の酒蔵や居酒屋を巡る旅情豊かな番組です。気が向くと、週末に放映された西日本の鉄道に乗り、六角さんの足跡をたどっています。家族も大ファンです。

日本酒は、水と米を原料に麹菌や酵母の力により醸されます。酒造りに適した水はミネラルが豊富で鉄分が少ない井戸水で、ミネラルの多寡で硬水と中・軟水に分かれ、硬水を扱う銘醸地・灘の酒は「男酒」、中軟水の伏見の酒は「女酒」と呼ばれます。山田錦や五百万石のような酒づくりに適した酒米を精米して蒸し、種麹を撒いて麹をつくり、これに蒸米と水と酵母を加えて酒母を造ります。酒づくりのリーダー・杜氏の下、蔵人が仕込み桶やタンクで丹念に酒を造ります。麹によるでんぶんの糖化と酵母によるアルコール発酵が同時に進む「並行複発酵」により美酒が誕生します。趣味で訪ねる冬季の酒蔵では本格的な酒造りが行われ、黙々と働く蔵人の動きや甌から上がる蒸気、上槽した酒を絞つて火入れ・瓶詰めする作業をつぶさに見ることができます。見学後の試飲もまた楽し。

日本酒には、酒米の銘柄や、米の精



米歩合、醪づくり、醸造用アルコール添加、貯蔵方法により様々な商品があります。酒蔵の数は約千四百から千六百と言われています。各蔵の商品数は10～15なので、一生かけても試すことはできませんね。未踏の北海道や青森、岩手、福島県の酒蔵探訪は、退職後の密かな愉しみに残しています。



【西田吉志】今年もよろしくお願いします！新しい年の幕開け。厄年も明けた今年は、小さなトラブルも大きな不安も勢いよく乗り越え、新しい価値や経験を少しづつ育む一年にする。



【福井龍磨】中里介山の大長編時代小説『大菩薩峠』を読み始めた。同じ幕末が舞台の小説では島崎藤村の『夜明け前』が有名だが、こちらは超大作でありながら存在すら忘れられている。知られざる金字塔。



20年以上続いている餅つき大会には世代を問わず180名ほどが参加され、外国人の方も多く見られた。来年は餅を全種類制覇してみようか。

津守地活協が主催する「津守地域餅つき大会」が元津守幼稚園で12月14日に開催された。つきでの餅を田當てに取材に行つた。

園庭で杵と臼でつく「餅つき」は子どもに大人気。とくに目を引いたのが餅米の蒸し器である。最近はガスが多いのだが、津守はなんと薪を使用している。

会場全体を包み込むような何とも言えない良い匂いはこれだつ。屋内には餅の実食コーナー。餅が白玉サイズで食べやすく、驚くほどに美味しい。きな粉の優しい甘みもさうだが、なんといつても餅本来の味と食感がたまらない。



大阪市の住民参加型地域組織「地域活動協議会」の活動に橋をかけよう「近ツ橋【ちかつきょう】」

近ツ橋

津守地域 餅つき大会



【谷口円】今年は生活に大きな変化がある予定。過去を振り返ってみると、10年くらいのスパンで人生の方向が変わる傾向にありますので、今年が新たな10年のスタートになるのかも。



【田岡秀朋】コトノネ最終刊。障がい者と歩む道を問い合わせた14年。地域と人を紡ぐ言葉はまだまだ必要。「また、会いましょう」の言葉に、勝手にライバル誌として、「なび」を続ける理由をもらったかな。

葉っぱの見つけ

私は草木が大好きです。
とくに観葉植物には心癒されます。私と葉っぱとのお喋りを聞いてください。



丸と四角どっちが好き?
そんなの聞かないで
わたしを見れば
必ずわかるはず
丸と四角どっちが強い?
おもしろいこと聞くんだね
わたしを見れば
絶対にわかるはず
丸と四角どっちが弱い?
そんなこと聞いてどうするの
わたしを突くと
丸と四角どっちも好き?
やっと聞いてくれたね
どっちも大好き
形なんて関係ない



赤井まゆみ

テマリ草のこと
ナデシコ科のナデシコ属。
まるでマリモのような形。
花言葉は
「純粹な愛」「才能」

湯かげん

運用益という第三の財源

社会保障も積極財政も良いが、先立つ財源はあるのか。ずっと堂々巡りの国会議論が続いてきた。そこに突如、公明党の岡本三成政調会長が「ジャパン・ファンド」の創設を言い出した。これがなかなかおもしろいので、勉強したい。岡本さんは、ゴールドマン・サックス証券出身で、投資のプロらしい。

読者は、GPIF（年金積立金管理運用独立行政法人）というものをご存知か。年金を管理している法人だが、いまや世界でもトップクラスの運用資産額となり、数百兆円規模だと言う。その他にも外為特会（外國為替特別会計）や中央銀行や公的機関が保有するETFなど政府系ファンドもあり、これら公共資産を一括してジャパン・

ファンド（仮称）なる政府系ファンドに預ける。この運用に、GPIFが積み上げてきた長期運用+分散投資による収益実績やリスクマネジメント（危機管理）能力を活かせば、500兆円規模の資産を運用し、利回り1%でも年間5兆円の恒久的で有力な財源となるという試算を岡本さんはされている。

遡ること25年、GPIFの前身である年金福祉事業団は官僚の天下り機関と化して年金保養基地（グリーンピア）事業等に失敗し、年金基金を自滅させた。その反省から、官僚や政治との関係を遮断され、かつ民間的な資産運用も制限され、GPIFという第三者機関の力を磨いてきた。このガバナンス

委託を、官でもなく民でもなく価格だけでない総合評価入札にするなら、事業と障がい者雇用の「二兎を追える」と取り組んできた。だか



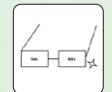
富田一幸

人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これからも「いい湯かげん」のテーマ探しに出かけます。

義な国会議論を期待したい。
ボクは前号の「湯かげん」で、立憲の「給付付き税額控除」、国民主の「介護最優やバート」の所得向上、維新の「副首都法」に期待しない。してみると、非自民が主導の政治をと書いた。これらに公明の「ジャパン・ファンド法」への期待も付け加えておきたい。してみると、非自民の役者は揃つて居ないか。楽しみだ。



[若松司] J-POP史上に燐然と輝く近未来テクノポップユニットが「コールドスリープ(復帰が前提の活動休止)」に入った。数年後には彼女らも40歳。次はどんな夢を見てくれるのだろう。今から楽しみだ。



[山村裕太] ちいかわの映画化が決定し、2026年夏に上映予定です。絶対に見に行くつもりではあります、さすがに一人で行く勇気が持てません。でも大きなスクリーンでモモンガを見たい葛藤。

皮膚算用

にしなり隣保館の館長が日々の出来事について胸のうちで皮算用していることを語っていくよ。



寺本良弘

地域の縁をひでつなぐ

松崎の
心の時間

100坪の家に住んでいる
知人の話を持ち出し「広い土地
で暮らせて羨ましい」と呟く友
人。「広ければ広いほど良い」
と語る彼の言葉に、トルストイ
の短篇「人にはどれほどの土地
がいるか」を思い出しました。

常日頃「自分の土地が十分に
あつたら幸せ」と願っていた主
人公のパホームは、ある人から
「1000ルーブルの代金で、
一日歩いて回った全ての土地をお分けしよう。但し、
日没までに出発地点に戻らなかつたら、土地を受け
取ることが出来ない」と提案され、受けて立ちます。

日没間近、欲をかいて遠くまで来すぎたことに気づ
いたパホームは急いで走り帰り、日没までに出発地
点に辿り着き、約束どおり広い土地を手に入れました。
しかし走りに走つて疲れ果てた彼は、この幸運を称
えられつつもその場で倒れ死に、結局6フィートの
墓に納まつたという顛末。

起きて半畳寝て一畳——必要以上に求めるよりも
足るを知る(知足者富)ことが真の幸せに通じてい
る、つまり心次第で誰もが幸せになれるのだと教え
られます。

松向寺
通法

写真は人生の一部が映ったもの。ここは思い出や自慢の一枚を少しご紹介するコーナーです。



ワタリ
の1枚

『思いを馳せる』

2026年、干支は午。馬は私が一番心惹かれる動物です。理由は枚挙に暇がありません。賭けないのに駆ける馬の姿を見たいがために競馬場へ連れていってもらつたことも。写真は以前、伊勢神宮にて撮影しました。昔は神社によく馬がいたそうです。近所の神社に馬がいたら毎日通っていたのになあ。

(編集スタッフ 西井亜花梨)

ゆ~とあい

にしなり隣保館

にしなり隣保館「スマイル ゆ~とあい」は、地域コミュニティ全体が抱える課題の解決をめざす民設民営の福祉施設です。日々悩んでおられる困りごとはありませんか?お悩み解決のためにできることをいっしょに探しましょう。

なび1月号(vol.227)

発行日:2026年1月1日(創刊日:2007年1月1日)

発行:株式会社ナイス

住所:大阪市西成区長橋3-6-33

電話:06-6563-1150

E-mail:info@nice.ne.jp

url:<https://www.nice.jp/>

編集長:西田吉志

編集:磯拓哉、沖田一志、笹川勝正、住友宣夫、
田岡秀朋、福井龍磨、山村裕太、若松司(あい
うえお順)

イラスト:hidarimaki、西井亜花梨

デザイン:谷口円

(株)ナイス
ホームページ

